

サロメと世紀末芸術

歴史の鹿威しの的解決

2022/12/10



世紀末的なヨハネ

預言者ヨハネほど可哀想な人はいません。イエスよりも先に生まれた兄の身分であり、師であり、保護者であり、先達でありながら、いつもイエスの後塵を拝しています。世間からは、預言者や洗礼者として尊敬されてはいるのですが、イエスと間違われて打ち消すのに苦労しています。それに、これと言った手柄話や奇跡の物語はありません。聖書では、着ている物もラクダの皮衣で、腰には革の帯をしめ、いなごと野蜜を食べている粗野な野人として描かれています。最後にはユダヤの王ヘロデ・アンティパスをいさめたので捕らえられ、ヘロデの義理の娘サロメのために首を斬られて獄死します。死後もその骨は焼かれて野に散布されました。哀れと言えば哀れです。それでヨハネは、19世紀の世紀末芸術家たちの格好の題材となりました。

世紀末芸術は鹿威し

私の「世紀末芸術」(fin de siècle art)の定義は「鹿威し」(しおどし)です。あのお寺や大きな庭園にある竹で作った水受けの竹筒です。川から引いた水が竹筒に一杯になると突然竹がひっくり返って「コトン」と鋭い音を立ててシカやイノシシを追い払うのです。満杯になると、蓄えていた水がドッと一斉にあけられて竹筒は瞬時に空(から)になるのです。ここ 100 年の時間を掛けて一杯に溜まった水こそ、ゴミや汚水や暴力や犯罪や殺人や恐怖や不正や腐敗政治や賄賂や倒産や火災や戦争など、一世紀にわたる負の遺産なのです。世紀末の芸術家たちは、この時代のエロティックなものやグロテスクなものやナンセンスなものをあえて一堂に展示して一挙に捨て去る精算作業をしているのです。一種の「カタルシス」(精神浄化)であり、怖い物見たさでもあります。



美に殉じる

楽劇《サロメ》は、冒頭から狂ったように異常なシーンがつづきます。宮殿の外のテラスから王女サロメを見つめる傭兵隊長ナラボートの異常なサロメ賞賛で始まり、夜空に煌煌と輝いている月を小姓が不気味なものを見るように畏れます。

ナラボート

サロメ王女の今夜美しく見えることはどうだ。

小姓

それよりあの月を御覧なさい。
変に見えるではありませんか。
墓穴の中から出て来た女子のような。

月はラテン語で「ルナ」(Luna)です。英語で「ルナーティック」(lunatic)といえ、
「気の狂った」ことをいいます。それから起きるナラボートの突然の不可解な自害は「耽美主義的なもの」です。ナラボートはサロメの美に魅されたのです。美の犠牲者です。サロメの美に殉(じゅん)じたのです。世紀末的な異常な現象です。彼は、死ぬときにはなにも言わず、サロメの美しさに迷って、ヨカナーンに愛をねだるサロメをながめながら、恍惚の状態、狂ったままで死んでいきます。だれにも、彼の死の原因などはわかりません。それは、天空に掛かる月のせいなのかも知れません。彼の死の原因が分かるほど、サロメを愛した者はいないからです。

耽美主義の執拗な描写力

サロメは、ヨカナーンの唇の赤さがいかに赤いかを百万言を費やして言いつのりします。ただ、「まったく赤かった」とか日本の政治家のように「最高の表現で赤いと言おう」などと言っておけばそれで良かったのに、次のように口を極めて、「赤い」「赤い」と言いつづけるのです。私たちは、この美辞麗句の繰り返しに飽き飽きします。でも、それをグッと我慢して、読んだり聞いたりしなければなりません。ここが耽美主義作家の腕の見せ所だ

からです。彼らは決して飽きません。例(たと)える例は決して涸れません。表現は豊富です。それも自然に出てきます。これが耽美主義作家の持ち味です。彼らは、本当に「美」が大好きなのです。「好きこそ物の上手なれ」です。まだまだ、彼らの想像力は無限の働きをします。いくら語っても語り尽くせないのが「美」です。困ったものです。

サロメ

わたしはお前のその口が所望だ。
 ヨカナーン。お前の口は象牙の塔に結び付けた猩々緋(しょうじゅうひ:やや黒みをおびた鮮やかな紅色)の紐のような。
 熟した柘榴を銀の小刀で切るような。
 チルスの園に生えている柘榴の花は、薔薇の花より赤いけれど、お前の口のように赤くはない。
 帝王の出御の知らせに吹き鳴らす、いかなる敵をも恐れさせる喇叭(ラッパ)の赤い音も、お前の口ほど赤くはない。
 お前の口は葡萄酒を醸す桶の中に入って踏んでいる杜氏(とうじ)の足よりも赤い。
 お寺の軒に住んでいて、坊さんたちに餌を貰う鳩の足よりも赤い。
 お前の口は海の底の薄明かりの珊瑚(さんご)の枝、モアブの洞穴の紫貝の染色、帝王の紫。
 世の中にありとあるものにお前の口より赤いものは無い。
 どうぞ、お前のその口に接吻をさせておくれ。
 わたしはお前の口に接吻せねばならぬ。
 ヨカナーン。わたしは接吻せずにはおかぬ。

同様に、サロメは、ヨカナーンの身体の白さがいかに白いかを千万言を用いて言い囃します。それは次のようです。

サロメ

ヨカナーンや、わたしはお前の体に惚れた。
 ヨカナーンや、お前の体は、鎌の触ったことのない、野の百合のように白い。
 ユダヤの山の上に降って、溪間に落ちて来る雪のように白い。
 アラビアの妃の庭に咲く薔薇もお前の体ほど白くはあるまい。
 アラビアの妃の庭、妃の香料を作る庭の薔薇でも、草葉の上に降りて来る黄昏の素足でも海の上の月の乳房でも、世の中にありとあらゆるものにお前の体ほど白いものはあるまい。
 どうぞ、そのそなたの体に触らせておくれ。
 お前の体は気味が悪い。
 らい病やみの体のような。
 蛇の這う塗壁のような。
 蠍(さそり)の巣を食う塗壁のような。
 あらゆる穢い物を埋めた墓の上を塗潰した土のような。
 気味が悪い、お前の体は気味が悪い。

サロメはまた、ヨカナーンの黒い髪の毛を愛(め)でます。

サロメ

わたしはお前の髪に惚れた。
 ヨカナーンや、お前の髪は葡萄のような。
 エドムの国の葡萄棚に下がっている黒い葡萄のような。
 お前の髪はセドルスの木のような。
 レバノンの山に立っている大きいセドルスの木のような。
 獅子や山賊が昼の間その蔭に隠れようとするセドルスの木のような。
 長い、長い暗の夜でも、月が顔を隠して、小さい星共が心細がる暗の夜でも、おまえの

髪ほど黒くはない。
奥深い森に住まっているしじまでも。
世の中にお前の髪ほど黒いものは一つもあるまい。
どうぞ、そのお前の髪に触らせておくれ。
お前の髪の毛は厭らしい。埃だらけだ。汚いものだらけだ。
丁度荆棘(いばら)の冠のようにお前の頭に載せてある。
蛇を巻付かせたようにお前の頸に垂れている。
わたしはお前の髪の毛は嫌いだ。

最後にサロメはいいます。

サロメ

おう、ヨカナーンや、ヨカナーンや。
お前ばかりが美しい。
お前の体は銀の礎の上に立っている象牙の柱のようだった。
鳩の沢山飛んでいる、銀の百合の咲いている花園のようだった。
世の中に、お前の体ほど白いものはなかった。
世の中にお前の髪ほど黒いものはなかった。
世の中にお前の唇ほど赤いものはなかった。
お前の声は、御社の香炉のようで、わたしがお前をじっと見ていると不思議な音楽が耳に響いた。
ヨカナーンや、なぜお前はわたしの顔を見てくれなかったの。
ようもお前は、自分の神を見ようと思っているものの目隠しの中でお前の目を隠したね。
ヨカナーンや、なるほどお前は、神をば見ていただろう。
その癖わたしを、わたしをちっとも見なかったのね。
もしわたしを見たなら、きっとわたしを愛してくれたに違いない。
お前の美しさが慕わしい。わたしはお前の体が欲しい。
わたしの渇きは酒では止まらぬ。
わたしの飢は林檎では直らぬ。ヨカナーンや。
まあ、わたしはどうしたら好かろうね。
川の水でも海の水でも、わたしの胸の火は消えぬ。
ええ、なぜお前はわたしの顔を見なかったのだえ。
つい見てさえくれたなら、わたしを愛してくれたらうに。
きっとわたしを愛したに違いない。
死の秘密より大きいのが、愛の秘密であるではないか。

これでは、いつまで経っても終わりません。ヨカナーンをいかように、いくら讃えても讃え切れずにいます。「美」は、時間的に永遠だからです。語りつくすには永遠の時間が必要です。

ヘロデの宝物

同じことはヘロデ・アンティパスにも言えます。彼もまた、サロメに魅せられた一人です。若いサロメが大好きなのです。サロメが手に入れば、もっている金銀財宝など惜しくはありません。領土の半分をサロメにやってもいいと思っています。彼はサロメに自分の財宝を自慢します。そして、それをそっくりサロメにやろうと、その財宝の数々をサロメの前で数え始めます。ここでも耽美主義作家の登場です。この世の美しいもの、高価なもの、珍しいものを羅列してサロメの気持ちをゆすります。さすが、ユダヤ第一の大王さまです。私たちが見たことも聞いたこともないような宝物がぞろぞろ出てきます。鷗外も訳すのに、さぞ大変だったでしょう。一つでも良いので、私たちも、一度は手に取ってみたいものです。

ヘロデ

お前がそういうのは、俺が始終こんな風にお前を見ていたので、困らせるのだろう。
 お前が余り美しいので、俺が迷ったのだ。
 ああ、ああ、葡萄酒を特って来い。咽が渴く。
 サロメ、サロメ、仲好くしようではないか。
 よく思っ見てくれい。
 ああ、なんというはずであったか、なんであったか。
 おう、そうであった。
 サロメ、お前は俺の飼っている白い孔雀を知っておろうな。
 あのミルツスの木の間に歩いている、美しい、白い羽の孔雀の群を知っているだろうな。
 あれをお前にみなやろう。
 あの孔雀のような好い孔雀を持っている王は、世界中に俺の外にはあるまい。
 俺は百羽持っている。あるたけみなやろう。
 ああ、俺のいうことを聞いてくれないのだな。
 まあ、騒いでくれるな、サロメ。
 俺は、お前の見る通りに、落ち付いている。
 聞いてくれい、俺はこの土地に宝物を埋めている。
 お前の母にも見せたことのない宝物がある。
 目を驚かす程のことだ。
 真珠を四股(よつまた)に付けた顛飾り(くびかざり)がある。
 俺は色々な黄玉を持っている。
 虎の目のように黄色いのと、山鳩の目のように赤いのと、猫の目のように緑色なのとある。
 俺は蛋白石を持っている。
 その光は氷ほど冷たい目のようで、どれもみんなお前にやる。
 俺は衰微投石を持っている。
 緑柱玉を特っている。
 緑玉隨を持っている。
 紅宝玉を特っている。
 赤続稿瑤を持っている。
 風信子石を持っている。
 玉髓を持っている。
 みんなやって、その上になんをでも添えてやる。
 俺は水晶を持っている。
 それを透して見ることは、女子には許してない。
 俺は螺細(らでん)の箱に入れてある珍しいトルコ石を三粒特っている。
 それを額に当てていると現実でないものが見える。
 みんな珍しい宝物だ。
 どれが欲しいか。サロメ。
 俺の自由になるものなら、なんでもお前にやらぬとはいわぬ。
 ただあの男の命だけは、どうか俺に望んでくれるな。

サロメ

どうぞヨカナーンの首を下さりませ。

サロメの勝ちです。ナラボートと同じで、一番欲しいのは、美しい人間です。サロメも、金銀財宝ではなく、若くて美しいヨカナーンが欲しいのです。

世紀末芸術家ワイルドの耽美主義

オスカーワイルドの研究家の一人リチャード・エルマンは、ワイルドについて次のように評しています —

19世紀末のワイルドは、われわれの二十世紀人のひとりである。かれの機知は更新を促がす動因であり、百年前と同じく今もなお当を得ている。かれの作品およびかれの人生が共に提起する諸問題は、まじめさ、かれがいつも関知しないと自称するあのまじめさという性質をその作品に添えるのである。かれの業績は主張していたとおり生きのびた。 **芸術のなかで至高の作り話を達成し、芸術を社会の変化と関連させ、個人的な衝動と社会的な衝動とを結びつけ、奇矯で奇異なものを消毒され規格化されることから救い、厳酷の道徳を共感の道徳に換えようとするかれの努力** をわれわれは継承する。かれはヴィクトリアの世界よりもわれわれの世界の人なのだ。今や、スキャンダルの彼方に、かれの最高の著作は時間によって確認され、かれは高邁な精神の人として、じっとわれわれの前に立っている、かくも寛容な、かくも愉しく、かくも正しい寓話や通説を口にえ、笑いながら泣きながら。

このエルマンのワイルド評は、なるほどと感心させられます。ワイルドの世紀末的耽美主義作は、「奇矯で奇異なものを消毒され規格化されることから救」ったのです。ワイルドの世紀末的芸術である「鹿威し」は、すべてを流し去るためではなく、広く開示するために奇矯で奇異なものまでも人前で流してみせたのです。ヨハネとサロメとナラポートの死は、この三人の「個人的な衝動」を、20世紀の人たちの「社会的な衝動」とを結びつけたのです。

[2022/12/10 都築正道]



Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde 1854-1900